

# 方杖ヲ有スル橋桁ノ計算法ニ就テ

東 福 寺 正 雄

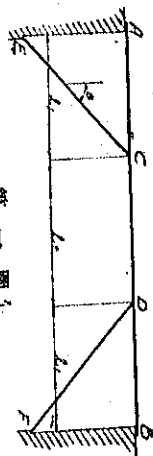
## 緒 言

從來坊間ニ行ハレタル多クノ橋梁書ニ記載セル方杖ヲ有スル橋桁ノ計算法ニハ大ナル缺點ヲ有セリ而シテ其ノ缺點タル人造橋水路橋等ノ如ク偏荷重ヲ受クルコト稀ナルモノニアリテハ深ク憂慮スルニ足ラスト雖鐵道橋ノ如ク常ニ偏荷重ヲ受クルモノニアリテハ實ニ寒心ニ値スルモノアリ然ルニ近時輕便鐵道ノ著シキ發達ノ結果ハ鐵道用トシテ益々此ノ種ノ橋梁ノ多數ヲ見ントス是ニ於テ吾人ハ此ノ缺點ヲ默視スルニ忍ヒス敢テ自ラ揣ラス爰ニ一文ヲ草シ以テ識者ノ教ヲ乞ハント欲ス

今吾人ハ從來行ハレタル計算法ノ誤ヲ訂サント欲スルモノナルヲ以テ順序トシテ先ツ從來ノ計算法ヲ略述シ次ニ其ノ缺點ヲ指摘シ更ニ進ソテ吾人ノ用ヒント欲スル新計算法ヲ述クヘシ

## 第一章 從來ノ計算法

桁  $AB$  ハ兩端  $A, B$  ノ外更ニ  $CD$  ニ點ニ於テ支ヘラルハヲ以テ  $AODB$  ノ四ツノ支點ヲ有スル連續桁トシテ其ノ大サヲ計算スル事アレトモ普通ニハ  $l_1, l_2$  ノ内大ナルモノヲ採リテ單桁トシテ其ノ彎曲率ヲ計算ス



たに

次ニ方杖 CE 及 DF ノ應力ハ

$$CE = R \sec \theta$$

但シ R ハ C (又ハ D)ニ於ケル最大反力 θ ハ OE ノ傾斜角 トス

又 AC (或ハ BD)ノ張力ハ

$$AC = R \tan \theta$$

而シテ等布荷重ノ場合ニハ

$$R = \frac{1}{2} w(l_1 + l_2)$$

但シ w ハ單位ノ長サニ於ケル荷重 トス

又單一動荷重 Wヲ受クル場合ニハ R ハ Wニ等シク二集中動荷重 W<sub>1</sub> 及 W<sub>2</sub>ヲ受クル場合ニハ

$$R = W_1 + \frac{W_2(l_2 - a)}{l_2}$$

$$R = W_1 + \frac{W_2(l_2 - a)}{l_1}$$

ノ内何レカ大ナル方ヲ採リテ AC 及 CE ノ大サヲ定ムヘシ

但シ a ハ W<sub>1</sub> W<sub>2</sub> 間ノ距離 トス

### 第二章 從來ノ計算法ノ缺點

前記ノ計算法ハ一見シテ少シモ缺點ナキカ如クナリト雖熟々桁其ノ構造ヲ視ルトキハ大ナル缺點ノ存在ヲ知ルヲ得ヘシ蓋シ桁ノ構造カ其ノ計算法ト一致セサルカ爲ニシテ或ハ計算法ノ缺點ト稱スルヨリ寧ロ構造ノ缺點ト稱スルヲ以テ適當トスルナルヘシ然レトモ構造ハ基ニシテ之ニ適從シテ計算ヲ行フヲ普通ノ順序トセハ此ノ構造ト計算トノ不一致ヲ以テ計算法ノ缺點ト

稱スルモ亦スシモ不可ナカラルヘシ  
 今普通ノ桁橋ヲ視ルニ一般ニ桁ノ兩端ハ單ニ枕材ノ上ニ据エ置カルハノミニシテ殆ソト固定裝  
 置ヲ有スルモノアルコトナシ腕木ヲ用フル場合モ亦略同一ナリ然ルトキハ  $AO = \text{働ク } R \tan \theta$  ナ  
 ル張力ハ如何ニシテ之ヲ橋臺ニ傳フヘキ若シ又連續桁トシテ計算スル如キ場合ニハ動荷重ノ位  
 置ニヨリテ時ニ起ルコトアル下向反力ハ何ニヨリテ之ヲ支持スルコトヲ得ヘキ之レ吾人ノ解釋  
 ニ苦ム問題ナリ

此ノ桁端ノ固定裝置ヲ缺クコトハ實ニ從來行ハレタル計算法ノ重大ナル缺點ニシテ之ニヨリテ  
 單桁トシテ若シクハ連續桁トシテノ計算法ハ實ニ其ノ根柢ヨリ覆サレタリト稱スルモ不可ナカ  
 ルヘシ唯桁カ完全ナル對荷重ヲ受ル場合ニ於テハ  $h_1$  及  $h_2$  ヲ各單桁トシテ算出セル  $O$  及  $D$  ニ於ケ  
 ル反力ハ互ニ相等シキヲ以テ  $OE$  及  $DF$  ノ水平分力  $R \tan \theta$  モ亦互ニ相等シキ故ニ  $AO$  及  $DB$  ハ  
 張力ニ堪エルコト能ハストスルモ此ノ水平分力ハ  $OD$  間ニ壓力トナリテ働キ以テ其ノ均衡ヲ保  
 シコトヲ得ルノミ然ルニ偏荷重ヲ受クル場合例ヘバ  $W$  ナル單一荷重カ  $O$  ニアルル如キ場合ニハ前  
 記ノ計算法ニヨレバ  $OE$  ノ水平分力ハ  $R \tan \theta$  ニシテ  $AO$  ハ張力ニ堪エサルコト前述ノ如シトセ  
 バ勢ヒ  $CD$  ノ壓力ニヨリテ  $O$  點ノ均衡ヲ保タサルヘカラス然ルニ此ノ場合ニハ  $DB$  ハ水平力ニ  
 堪エサルコト又前述ノ如クニシテ  $DE$  ハ無應力ナルカ故ニ若シ  $CD = R \tan \theta$  ナル壓力アルトキ  
 ハ爲ニ  $D$  點ノ均衡ハ破壞セラルハニ至ルヘシ是此ノ計算法ノ根本的改正ヲ要スル所以ニシテ  
 吾人カ緒言ニ於テ偏荷重ヲ受クルコト稱ナルモノニアリテハ深ク憂フルニ足ラスト稱セルノ理  
 モ亦爰ニ存セリ

### 第三章 新計算法

吾人ハ桁端ノ構造ニ適應スル爲ニ

桁端 A 及 B 二ハ上向反力ノ外他ノ如何ナル力ヲモ生スルコトナシ  
ナル要件ノ下ニ桁ノ計算法ヲ攻究スルコト下ノ如シ

第一節 單一動荷重ノ場合

(イ) 荷重カ AC 間ニアル場合

荷重カ AC 間ノ任意ノ一點ニ側クテキハ先ツ桁ハ撓垂ラ起シ O 點ヲ下方ニ壓迫シ爰ニ OD = 或  
應力ヲ生スヘシ然ルトキハ此ノ壓力ノ水平分力ハ右方ニ向ラモ AB 二點ハ水平反力ヲ生セサル  
故ニ桁全體ノ均衡ヲ失シ桁ハ少シク右方ニ滑動シ其ノ結果方杖 OE ハ E ヲ中心トシ DF ハ F ヲ  
中心トシテ右方ニ回轉シ桁ハ ACDB ナル位置ヨリ變シテ A'C'D'B' ナル位置トナリ O 点ハ下降シ D  
ハ上昇シ AD 間ハ彎曲ラナシ B 端ハ浮上シ遂ニ第二圖點線  
ノ如キ形狀ヲナスニ至ルヘシ是ニ於テ反力ハ A 点及 F ノ三  
點ニ起リ B ハ何等ノ力ヲモ起スコトナシ  
今 A E 及 F ニ於ケル反力ヲ夫々 A E 及 F トセム桁全體カ均  
衡ヲ保ツ爲ニハ

$$W = A + E \cos(\theta + \delta_1) + F \cos(\theta - \delta_2)$$

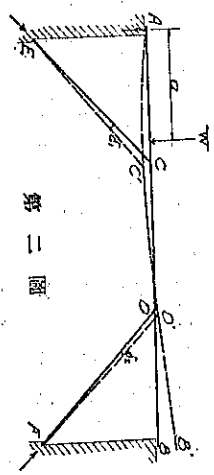
$$E \sin(\theta + \delta_1) = F \sin(\theta - \delta_2)$$

又 A 點ノ周リノ力率ノ平衡ヲ考フヘハ

$$W a = E l_1 \cos(\theta + \delta_1) + F(l_1 + l_2) \cos(\theta - \delta_2)$$

然ルニ  $\delta_1$  及  $\delta_2$  ハ  $\theta$  ニ比シテ非常ニ小ナル故ニ之ヲ省略スルトキハ

$$W = A + (E + F) \cos \theta \dots \dots \dots (1)$$



第二圖

$$E = F \dots \dots \dots (2)$$

$$W a = E l_1 \cos \theta + F(l_1 + l_2) \cos \theta \dots \dots \dots (3)$$

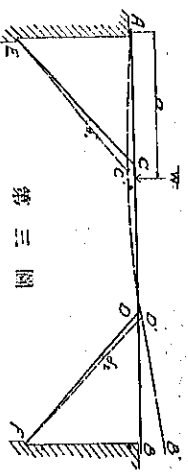
依テ此ノ三式ヨリ次ノ結果ヲ得

$$E = F = \frac{W a \sec \theta}{2l_1 + l_2} \dots \dots \dots (4)$$

$$A = W \frac{l_1 + \frac{l_2}{2} - a}{l_1 + \frac{l_2}{2}} \dots \dots \dots (5)$$

即チ E 及 F ニ於ケル反力ハ全徑間ヲ單桁トシテ考ヘタル右端 B ノ反力ニ方椀ノ傾斜ノ正割ヲ乘シタルモノニ等シク又 A ニ於ケル反力ハ全徑間ノ半ヲ徑間トスル單桁ノ反力ニ等シ

(5) 荷重カ OD 間ニアル場合(但シ荷重ハ徑間ノ中央ヨリ左方ニ偏在スルモノトス) 此ノ場合ニ於テモ亦桁ハ AD 間ニ彎曲ヲ生シ C ハ下降シ D ハ上昇シ B ハ浮上スルノ傾向アルコト第三圖點線ノ如クナルヘシ



隨テ反力ハ AE 及 F ノ三點ニ生スルコト前ノ場合ト同シ 故ニ全外力ノ均衡並ニ A 點ノ周リニ於ケル力率ノ平衡ヨリ

次ノ三式ヲ得

$$W a = A + E \cos(\theta + \delta_1) + F \cos(\theta - \delta_2)$$

$$E \sin(\theta + \delta_1) = F \sin(\theta - \delta_2)$$

$$W a = E l_1 \cos(\theta + \delta_1) + F(l_1 + l_2) \cos(\theta - \delta_2)$$

前ノ場合ト同シク  $\delta_1$  及  $\delta_2$  ラ  $\theta$  ニ對シテ省略シ且上記ノ三式ヲ解クトキハ

$$E = F = \frac{W a \sec \theta}{2l_1 + l_2} \dots \dots \dots (6)$$

$$A = W \frac{l_1 + \frac{l_2}{2} - a}{l_1 + \frac{l_2}{2}} \dots \dots \dots (7)$$

即チ全ク(5)ノ場合ト同一ナリ之ニヨリテ次ノ斷案ヲ下スコトハ必シモ更ニ證明スルノ要ナカルヘシ  
 荷重カ徑間ノ左方ニシテ存在スル場合ニハ其ノ數カ多數ナル場合ト雖  $\Delta$  ニ於ケル反力ハ全徑間ノ半ニ等シキ徑間ノ單桁ノ反力ト等シク  $E$  及  $F$  ニ於ケル反力ハ全徑間ヲ單桁ト考ヘタル  $B$  ノ反力ニ方杖ノ傾斜角ノ正割ヲ乘シタルモノニ等シ

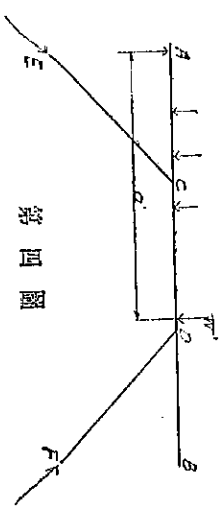
第二節

主荷重カ徑間ノ左方ニアル場合ニ更ニ他ノ荷重カ徑間ノ右方ニ加ハルトキ桁ノ彎曲ニ及ボス影響

今新ニ右方ニ加ヘラルハ荷重ヲ  $W'$  トシ其ノ  $\Delta$  ヨリノ距離ヲ  $a'$  トシ又  $W'$  ノ加載後モ尙全荷重ノ重心ハ徑間ノ左方ニ偏在スルモノトス

(5)  $W'$  カ  $CD$  間ニ加載セラレタル場合

$W'$  ノ加載後モ尙全荷重ノ重心カ左方ニ偏在スルトキハ桁ハ  $AD$  間ニ彎曲ヲ保チ  $B$  端ハ浮上ノ位置ニアルヘシ隨テ其ノ反力ハ  $ADEE'$  ノ三點ニシ生スヘシ  
 今  $W' = W$  因スル  $ADEE'$  三點ノ反力ヲ夫々  $A'E'E'$  トスルトキハ



第四圖

前節ト同一ノ解法ニヨリテ

$$E' = F' = W' \frac{d' \sec \theta}{2l_1 + l_2}$$

$$A' = -W' \frac{d' - l_1 - \frac{l_2}{2}}{l_1 + \frac{l_2}{2}}$$

即チ  $A'$  ハ負力ナル故ニ  $A$  ニ於ケル反力ハ  $W'$  ノ加載ニヨリテ減少スルコトヲ示ス  
今徑間上任意ノ一點中央ヨリ左方)  $A$  ヨリノ距離ヲ  $x$  トセバ  $x$  カ  $l_1$  ヨリ小ナルトキハ其ノ點ノ

彎曲率ハ  $W'$  ノ加載ノ爲ニ  $W' \frac{d' - l_1 - \frac{l_2}{2}}{l_1 + \frac{l_2}{2}}$   $x$  タケテ減少スヘク又  $x$  カ  $l_1$  ヨリ大ナルトキハ其ノ點ノ彎曲

率ハ

$$\frac{d' - l_1 - \frac{l_2}{2}}{l_1 + \frac{l_2}{2}} x \geq \frac{d'}{2l_1 + l_2} (x - l_1)$$

即チ  $\alpha'(x + l_1) \geq \alpha'(2l_1 + l_2) \dots \dots \dots$  (8)

ナルニ從テ減少又ハ増加スヘシ

(3)  $W'$  カ  $DB$  間ニ加載セラレタル場合

此ノ場合ニハ桁ノ剛度其ノ他ノ關係ニヨリテ  $B$  ニ反力ノ生スルコトハ生セサルコトハアルヘシ  
先ツ  $B$  ニ反力ノ生セサル場合ヲ考フルニ前ト同様ニ

$$F' = F'' = W'' \frac{l' \sin \alpha}{2l_1 + l_2}$$

$$A' = -W'' \frac{l' - l_1 - \frac{l_2}{2}}{l_1 + \frac{l_2}{2}}$$

ナル故ニ前ト同一ノ理由ニヨリテ  $AO$  間ニ於ケル各點ノ彎曲ハ皆減少シ  $OM$  間ノ各點ニ就キテハ前同様ニ  $(M$ ハ徑間ノ中點)

$$\alpha'(x+l_1) \cong \alpha(2l_1+l_2)$$

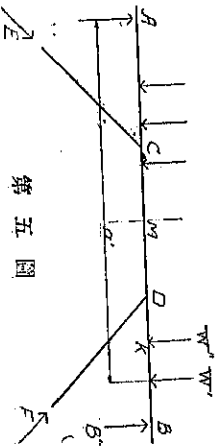
ナルニ從テ減少又ハ増加スヘシ  
然ルニ此ノ場合ニハ  $\alpha' > l_1 + l_2$   $\alpha' > \alpha$  ナルカ故ニ

$$\alpha'(x+l_1) > \alpha(2l_1+l_2)$$

ニシテ隨テ  $OM$  間ノ各點ノ彎曲モ亦  $W''$  ノ加載ニヨリテ減少スヘシ  
次ニ  $B$  點ニ於テ  $B'$  ナル反力ヲ生シタル場合ヲ考フルニ  $W''$  ト  $B'$  トノ合成力ヲ  $W'''$  トシ其ノ働點ヲ  $K$  トセバ  $K$  ハ勿論  $DB$  ノ間ニアルヘシ從テ其ノ結果ハ  $B$  點ニ於テ  $W'''$  ナル荷重ヲ加載セラレ  $B$  ニ反力ヲ生セサル場合ト同一ナルカ故ニ前述ノ理由ニヨリテ  $AM$  間ノ各點ノ彎曲ハ皆減少スヘシ

第三節 最大彎曲ヲ起ス載荷法

前節ノ所論ニヨリテ推斷スルトキハ  $AO$  間ノ彎曲ヲ最大ナラ



第五圖



シムル爲ニハ

徑間ノ左半ハ荷重ヲ滿載シ右半ハ無荷重ナルコト

ヲ要シ又 *OM* 間ノ任意ノ點 *a* ノ彎曲ヲ最大ナラシムル爲ニハ

$$A \text{ ヲ } \gamma \frac{a(2l_1 + l_2)}{(a + l_1)}$$

ナル距離ノ點ニ至ルノ間荷重ヲ滿載シ夫ヨリ右方ハ無荷重ナルコト(隨テ *DB*

間ノ無荷重ナルハ勿論ナリ)

ヲ要ス

#### 第四節 集中荷重系ニ對シ彎曲ヲ最大ナラシムル載荷法

前節ノ載荷法ハ等布動荷重ノ如キ場合ニ於テハ其ノ限界頗ル明瞭ナレトモ集中荷重系ノ場合ニ於テ却テ最於テハ其ノ荷重系ノ組織ニヨリ或ハ荷重系中ノ一部分ハ前節ノ限界外ニアル場合ニ於テ載荷法ハ大彎曲ヲ起スカ如キコト無キニシモアラズ是ニ於テ最大彎曲ヲ起ス荷重系ノ位置即チ載荷法ハ前節ノ限界ヲ離レテテ數字上ノ問題トナルカ故ニ爰ニ重ネテ之ニ對スル載荷法研究ノ要アリ而シテ此ノ場合ニ於テハ荷重ノ位置ハ必シモ前節ノ限界内ニ制限セラレスト其ノ限界外ニアル荷重ヲ彎曲ヲ最大ナラシムル位置ニ致ス爲ニ之ト聯動スル小荷重ヲ限界外ニ致スカ如キトキニシテ即チ限界外ニアル荷重ノ減彎曲作用ノ頗ル小ナルトキニ限ラテ以テ載荷法ノ研究ニ於テハ重ノ重心ハ徑間ノ左方ニ偏在スルハ勿論桁ノ右端ニハ少シモ反力ヲ起サハルモノト假定ス

#### (iii) *AC* 間ノ彎曲

彎曲ヲ考フル點ヲ *P* トシ全荷重系ノ重心ヲ *G* トシ *AP* 間ニアル荷重ノ重心ヲ *G'* トシ全荷重ヲ  $\Sigma W$ , *AP* 間ノ荷重ノ和ヲ  $\Sigma W'$ , *P* 點ニ於ケル彎曲率ヲ *M* トセバ (5) ニヨリテ

編 註 大津キヨシヲ編註ハ註釋ニ依リテ

$$A = \frac{\Sigma W}{AM} \cdot MG$$

$$M = \Sigma W \frac{MG}{AM} \cdot AP - \Sigma W \cdot GP$$

今此ノ場合ニ荷重系カ小距離  $d$  タケテ移動スルトキハ  $MG$  ハ  $MG+d$  トナリ  $GP$  ハ  $GP+d$  トナリ其他ノ値ハ變化スルコトナシ而シテ其ノ場合ニ起ル彎曲率  $M$  ノ變化ヲ  $\Delta M$  トセハ

$$\Delta M = \left\{ \Sigma W \frac{AP}{AM} - \Sigma W \right\} d$$

而シテ若シ前記ノ位置ニ於テ  $M$  カ最大ナルトキハ  $d$  ノ正負如何ニ係ラス  $\Delta M$  ハ必ス零若クハ負ナルヘシ而シテ斯クノ如キ要件ヲ充タヌハ唯  $d$  ノ係數ノ零ナル場合ニ限ルカ故ニ  $P$  ニ最大彎曲率ヲ起ス荷重ノ位置ハ

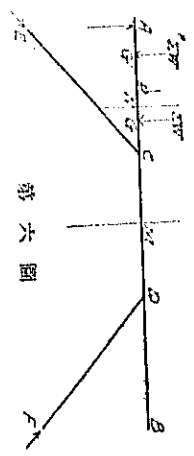
$$\frac{\Sigma W}{AM} = \frac{\Sigma W}{AP} \dots \dots \dots (9)$$

ナル場合ニシテ此ノ要件ハ全ク  $AM$  ラ徑間トセル單桁ト同一ナリ(但シ  $AM$  ラ徑間トセル單桁ノ場合ハ荷重ノ全部  $AM$  間ニアルヲ要スルモ此ノ場合ニ於テハ荷重系ノ一部分ハ或ハ  $AM$  區間ノ外ニアアルモ妨ナキノ別アリ)

(3)  $CM$  間ノ彎曲

$CM$  間ノ彎曲ヲ考フルニ當リ  $DB$  間ハ必シモ無荷重ニアラサルモ  $B$  ニ於テハ反力ヲ有セサルモノト考フルコトハ既ニ之ヲ述ヘタリ

今全荷重ヲ  $\Sigma W$  トシ其重心ヲ  $G$  トシ彎曲ヲ考フル點ヲ  $P$  トシ  $PB$  間ニ於ケル荷重ヲ  $\Sigma W$  トシ

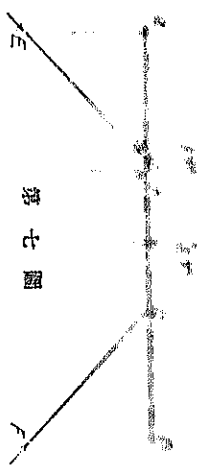


其ノ重心ヲGトシ、彎曲率ヲMトシ、(A)ノモリヲ

$$F = \frac{\sum W \cdot AG \cos \theta}{AB}$$

故 =  $M = F \cdot PD \cos \theta - \sum W \cdot P \cdot G'$

$$= \sum W \frac{AG \cdot PD}{AB} - \sum W \cdot P \cdot G'$$



今全荷重系カ小距離dヲケ移動セル場合ニ當リMノ受クル變化ヲΔMトスルトキハ

$$\Delta M = \left[ \sum W \frac{PD}{AB} - \sum W \right] d$$

ニシテ之レ亦(10)ノ場合ト同理ニヨリMカ最大ナル爲ニハdノ係數カ零ナルヲ要スル故ニ

$$\frac{\sum W}{AB} = \frac{\sum W}{PD} \dots \dots \dots (10)$$

即チ此ノ場合ハ單桁トシテ考フル場合ト異リ

全徑間ニ於ケル平均荷重カP點ヨリ右方ノ荷重ヲPDニテ除シタルモノニ等シキ場合ニ於テ

P點ニ最大彎曲ヲ生スヘシ

第五節 AC間ノ最大彎曲

一般重學ノ原則ニ從フトキハ彎曲ノ最大ナル點ニ於テハ其ノ剪斷力ハ零ナル故ニ今第六圖ニ於ケルP點カAC間ニ於ケル最大彎曲ナルトキハ

$$A = \sum W \frac{MG}{AM} = \sum W$$

即チ

574

$$\frac{\Sigma W}{AM} = \frac{P \Sigma W}{MG} \dots \dots \dots (11)$$

而シテ今考フル處ノ彎曲カ  $AG$  間ニ於テ最大ノモノナル爲ニハ(11)ト共ニ(9)ノ要件ヲ充タスヲ要ス

$$AP = MG \dots \dots \dots (12)$$

故ニ  $P$  ニ於ケル彎曲カ  $AG$  間ニ於ケル最大彎曲ニシテ同時ニ  $P$  點ニ最大彎曲ヲ起ス荷重ノ位置ヲ示ス要件ニシテ之レ亦  $AM$  ラ徑間トセル單桁ニ同シ(但書ハ前節(5)ノ場合ト同シ)

第六節  $CM$  間ニ於ケル最大彎曲

前節同様一般重學上ノ原則ニ從ヒ第七圖ニ於ケル  $P$  カ  $CM$  間ニ於ケル最大彎曲點ナル事ノ要件ヲ求ムレバ

$$\frac{\Sigma W}{AB} = \frac{P \Sigma W}{AG} \dots \dots \dots (13)$$

前節ノ場合ト同理ニヨリ(13)及(10)ヨリ最大彎曲ノ要件ヲ求ムレバ  $AG = PD \dots \dots \dots (14)$

即チ之ヲ文字ニ表ハストキハ

全荷重ノ重心  $G$  ト彎曲ヲ考フル點トノ間ノ距離カ  $AD$  ノ中點  $N$  ニヨリテ二等分セララル、場合ニ於テ其ノ點ニ  $CM$  間ニ於ケル最大彎曲ヲ起スヘシ

例

以上吾人ハ一定荷重ニ對スル反力ノ分布與ヘラレタル一點ニ對シ最大彎曲ヲ與フル載荷ノ限界並ニ集中荷重系ノ位置及與ヘラレタル荷重系ニ對シ最大彎曲ヲ起スノ點ト荷重ノ位置トノ關係ヲ論シタレバ更ニ進シテ彎曲率ノ計算ニ及フヘキ順序ナルトモ上記ノ諸件ニシテ決定セル以上

ハ計算ハ單ニ數字ヲ動カス代數的ノ手續ニ過キスシテ殆ソト論述ノ値ヲキヲ以テ之ヲ省略シ爰  
 ニ一ニノ例題ヲ擧ケテ以テ本論ヲ結ハントス

1. 荷重系ヲ次ノ如クシ  $l_1=6'$ ,  $l_2=8'$  ナルトキ桁ノ最大彎  
 曲率ヲ求ム

前記第三章第五節ノ要件ニ適合スル荷重ノ位置及最大彎曲  
 點ノ位置ハ圖(イ)ノ如クニシテ最大彎曲率ハ

$$M_{loc}^{max} = \frac{10 \times (6.25 + 1.25)}{10} \times 3.75 = 28.125 \text{ ft. tons}$$

次ニ  $CM$  間ニ於ケル最大彎曲率ヲ求ムル爲ニ第三章第六節  
 ノ要件ヲ求ムレハ圖(ロ)ノ如クニシテ最大彎曲率ハ

$$M_{CM}^{max} = \frac{10 \times (2 + 7 + 12)}{20} \times 7 - 10 \times 5$$

$$= 73.5 - 50$$

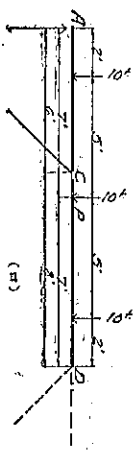
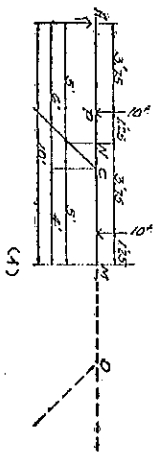
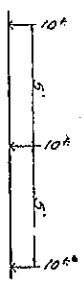
$$= 23.5 \text{ ft. tons}$$

若シ從來ノ計算法ニヨルトキハ

$$AC \text{ 間ニテハ } \frac{10 \times 6}{4} = 15 \text{ ft. tons}$$

$$CD \text{ 間ニテハ } \frac{10 \times 8}{4} = 20 \text{ ,, ,,}$$

此ノ兩結果ヲ比較セバ如何ニ從來ノ計算カ危險ナル方法ナリシカラ明ニスルヲ得ヘシ  
 2. 荷重系ハ前同様ニシテ  $l_1=l_2=4'$  ナルトキ



576

第三章第五節ノ要件ニ適合スル荷重系ノ位置及最大彎曲點  
ハ圖(ハ)ノ如ク其ノ彎曲率ハ

$$\max M_{AC} = 10 \times 3 \times \frac{3}{6} = 15 \text{ ft. tons}$$

又第三章第六節ニ適合スル場合ハ圖(ニ)ノ如ク其ノ彎曲率ハ

$$\begin{aligned} \max M_{CM} &= \frac{10 \times (0.25 + 5.25)}{12} \times 2.75 \\ &= 12.6 \text{ ft. tons} \end{aligned}$$

從來ノ計算法ニヨルトキハ

$$M = \frac{10 \times 4}{4} = 10 \text{ ft. tons}$$

即チ是等ノ兩結果ヲ比較スルニ2ノ例ノ如キハ實ニ50%ノ差アリサレハ吾人カ寒心ニ値スト稱  
セルモノ必シモ過言ニアラサルヘシ(完)

